



# 關西大學に於ける

## 報國隊の結成

學長 神戸 正雄

曩きに關西大學に於ては文部省の指令に従ひ、報國團を結成したのであるが、今回更らに同じく、文部省の指令に基き、報國隊を組織することになつた。此は報國團と別なものでなく、報國團を母體として其の隊組織を整へたものであり、報國團の修練組織を強化するものに外ならない。其の特に之を必要ならしめたのは、一には、今日の緊迫したる我國の臨戰情勢下に於て有事即應の體制を備へる事を要する事情に因るのである。今日の時局下に於て國家は、國家の必要とする農工生産の増強を計る爲めに學徒の補足的服務を要するといふ事情もあり、更らに一朝空襲等を受くるが如き場合に整備其他の要務に就くべき人手を學徒に求めるといふ事情もあり、勞々各學校に於て隊組織を整備して置くことが此要望に應ずるに役立つのである。隨ふて此隊組織は各地方別に於て其處にある數多の學校の間に於て聯絡を取つて置くことが必要となるのであり、仍ち我關西大學の報國隊は大坂地方部に所屬して其一翼となる譯である。

關西大學に於ては、關西大學々部報國隊と、關西大學豫科報國隊と、關西大學

大正十一年六月十五日創刊  
昭和十六年九月十日印刷  
昭和十六年九月十五日發行

編輯人 神田 敬 氏 監  
印刷所 大坂市北區堂島  
上三丁目十五番地  
谷口印刷所

大坂市東淀川區長柄  
中道二丁目十番地  
發行所 關西大學學報局

第一 關西大學に於ける  
報國隊の結成……………神戸正雄

第二 地政學と國防……………中村長之助

第三 物價問題に就いて……………高田保馬

第四 學内報……………

第五 校友欄……………

第六 會員消息……………

第七 校友會費拂込者氏名……………

専門部報國隊との三の報國隊を作る。何れも各所屬の教職員學生々徒の全員が隨時出動して公務に服し得る體制を整ふるものである。そして其の何れにも本隊の外に、特技隊、特別整備隊があり、本隊は各々二大隊に分れ、其下に數箇の中隊、分隊がある。特技隊は部科により多少異なるが、乘馬隊、自動車隊、自轉車隊、等がある。三報國隊の隊長は凡べて學長が之に當り、大隊長、特技隊長、特別整備隊長は教職員中の適任者をば隊長より任命し、中隊長、小隊長、分隊長は學生々徒中より任命する。

此隊組織の運営については、平素に於ける修練、生産増強の爲めの服務などについては格別難事をば認めぬけれども、空襲等を受けたる場合の整備については相當厄介なことがあらうと思はれる。此場合には勿論、臨機應變といふことも必要であらうが、又種々の場合を豫想して一應の準備はして置かざるばなるまい。斯やうにして臨戰時下に於ての學徒の隊組織が一應は整備し、國家の要望に應じて何時にても出動し得るやうになつた。學徒は國家の必要とする限り、勇躍夫々の部署に就いて服務することの心構を有たなければならず、必ずしも學業の勉強のみには従ふことが出来ぬのである。併し其だからといふて其方にばかり氣を取られて學徒の本務たる勉強を怠つてはならない。むしろ時局下に於ては學徒に一つ特別の任務が加はつたのであり、其方に時間を取られるだけ、其を補充するだけ、學業の勉強には一層出精しなければならぬのである。即ち是まで餘暇として居つた時間をば適當に勉強と公務とに向けやう工夫することが肝要である。

で右の新しい公務が増しても勉強の方をば忽にはしないやうに注意して欲しい。そうかといふて、あまりに身體を酷使して、過勞となり、折角大事な身體を傷めないだけの心掛もして欲しいものである。

# 地政學と國防

教授 中村 良之助

目まぐるしい世界情勢の推移を察知し錯雜せる國際關係に善處すべき方途に就いて、我國民は一齊に信賴するに足る新たな理論体系を要望する事愈々切なるものがあらう。眞實の處、外交史、國際法、國際經濟、國際商業貿易論或ひは軍事上等に就いて、従来の専門的な個々の「たより」得る解析だけでは満足し得ぬ要因を含んで現實事態は展開しつつあると云へよう。

斯くて、一面には現實態勢が、他面には對決する人々の志圖に於いて相互重複しつつ、世界は新秩序の招來と其理解を模索しつつある折柄、「地政學」なる名稱で齎らされつつある一系の理論と主張とは、我國民當面の要望たる「國際關係説明の學」には非らざる迄も、重用さるる傾向が見られる。國際關係提起の主体たる國家に就いて此地政學が持つ所の革新的主張と其綜合的な歴史地理理論の精彩は、舊年の政治的或ひは經濟的に専門と稱する抽象的説明乃至は機械的解析の分裂の欠点を匡諫するに足るであらう事は確かである。

抑々國家の動向、其生存と發展とに關しては常に地政學的にあつた次第で、其強國と稱さるるもの程國土と其れの住民との眞正なる結合と營局とを懸念するもので從而其生成的なる事、故に世界との一休性を把握するに懸念たるので、應は何れの強國にも地政學的志向、更に其理想化の傾向は認められると考へ得るのである。

從而地政學に關する文獻學は或ひは眞實の「地政學」の理論の修理固成に預りし當該強國民族とは必らずしも一致し又は恰當なるものとは考へられず、寧ろ異端

的ではあるが佛、獨、伊の如き舊來は國際環境の至難不利と考へられた國や地方に於いて、其努力の高度と學的純度が保たれる可能性の多いであらう事も考へ得ると云へる譯である。抽象知と個性の自覺によつて、何れの國でも正統であり、求められて居るに拘はらず此國に對する自然原緒の体認はとかくに忘却と紛飾に陥り易いものであるが、實は「無用なる國際的活動又は關係の惹起」と「眞にあるべき姿」との其誤認を救はんとする努力に地政學的構想が高く評價されるに至るのであらう。たとへば英米を同列に「もてる國」と眺めたり、ステートとライヒを單に國との標準的語で一樣に概念づけてしまへると思つたり、國家を依然として『法的保護の被委託者』及び法秩序の保證人と見做した「マンチエスター派」りする事に、就いては「國家は形式上の法律文句の單なる集積で無く、法秩序の保證がその目的ではない」と云ふ主張を參酌する必要があるであらうし

「國家は何よりも一つの生命体であり、生命の冒險、生命の諸要求、生命の權利を持つてゐる」との、原始感覺を呼戻して、國に就いての抽象知と民族や地域の個性の自覺との間に起る矛盾とを克服する事が先づ要請されるであらう。しかも此チエレインの地政學上の生命体説は、彼の昔の有體説と軌を一にしてゐるが、茲では其完了國家に意味があるので無くして完了への進行態勢に於ける過程——其構成的なる現進行に意味がある。従つて土地、國境、人民、生活と其資料に就いても、自然條件とは云ひ餘、常に生成的に眺

める事によつて、單なる地政域以上に、或ひは土地と「政」の力の侵透が問題であつたり、住民は同時に民族に、生活資料は資源と云ふが如く、新たな内容を馳らせつゝ、一聯の思想系列に充當しやうとされるのが地政學なのである。従つて地政學は地理學の進化せるものなりや」とか「政治學の具体性を持つたものなりや」といふ舊來と新來との比較類推によつてのみ、其本性は把握し兼ねるであらう。と同様にこれを「國際關係問題に充當する場合にも、舊來に同質と考へられるものが新來では異義に重点を見る事も多々あり得る」とへば航空機の進歩せる時代ともなれば、開戦——戰闘、策戦上、「英獨の相互の位置から「和」白の中立」その者が問題であるのに保證は絶対に不可能」なるにも拘らず依然として抽象的には可能視したり、ノールウエー進駐の意味を唯對英的に見て對ソ封鎖の意義を忘れたり、又はフィンランド態度決定に對する貢獻を見逃したりする等に就いて地政學は種々の見界を抱くものなのである。

一 偕、斯様な意味で、文獻學的にも地政學がドイツに由來すると考へられる「ゲオポリチク」といふ名にこだわるなら——から、現今の世界情勢の進行上に此の力を藉りて、分析説明を得ようとする事は、大体に有用でもあり、又、可能でもあるといふ次第になるのである。地政學は或程度、地理學者（ラツツェル）の手から又或時は政治學者（チエレイン）の手に成つたりした事は、斯學が地理と政治の兩學に因縁深い事は眞實であり、又我國での多くの人々はそう考へてゐるが、單にこれ等の人々の學説の讀破のみで済まし得ぬ思想的由來、乃至は當該國家又は時勢と云ふ基礎を見落しては地政學の本性を把握し得ぬ事は牢記すべき事實である。我國明治醫學の育ての親とも云はれた某獨人が三十余年にして我國を去るに臨んで最後に、實に最後

の機會に「日本人の科學習得の才能、賦性は實に恐るべきものがあるが、唯、獨逸や歐洲科學の育つた雲圍氣環境」を悟る事が残された、實に大仕事だ」と此の修學當初よりの根本問題を離國の刹那の其最後の餞別とした事は意味深長である。

ナチスは輸出物に非らずとヒットラーが警告する意味、而して其の謂は、獨逸民族進生の嚮導學たる地政學に於いては、常に此歴史の獨逸の背景によつて其建學の旨意をはじめて把握し得ると云へよう。換言すれば、獨逸民族の新興と其國家建設の倫理の一環を荷負ふのが地政學であるから、從來の科學分類の範疇に委し得ぬものがあるのである。

他面に歴史、たとへばヴォルフの民族文化史、や、民族諸學等と併せての國防科學、國民學を編成しつゝある事も參考とすべきであらう。今回の大戦には前大戦からの因由する者が多々あると稱されるのは思想的流れに由るのだが「地政學」は實に其最大なるもの一つであつて、單に獨逸一國にかゝる思想的傾向が擡頭したのでは無く、佛國にもあるのであるが、唯民衆に「爲政者」との不明によつて表面潮流とならなかつたので佛國の敗因も亦茲に在りとも考へ得る位である。國家を擧げて有史以來の大動亂の後、たとへば戰捷の民とは云へ其處に聖國の理想や、民族の賦性と可能地域と資源等、歴史と地理にまつわる一切を反省する事は將に「有史以來未曾有」と稱される程に熾烈なるものがあつた事も事實である。佛國地政學の一端は本學研究論集に發表した「かゝる民族や國家の深淵なる生活觀に關するもの」一技が地政學なのである。

地政學は現實ドイツの國民教育學、民族發展に預る政策學なのであつて從而、單なる論理以上に多分に情感を包藏する事も事實である。既述の如く、文獻學的にラツツェルとか、チェレインその者に拘はらぬ、

むしろ此人々のかゝる學的構想にまで訴へたる事實を知る叡知と感覺こそ地政學を決するものと稱して過言では無い。此の消息については近刊の「オートマルキーと地政學」ヨハンネス・シュトイェ渡邊義晴譯は好著として歪みかゝる我國の輸入地政學の一つの戒心書となるのであらう。次に二三の点を紹介しやう。先づ人々は虛心坦懐に次の文章から一つの教訓的事實を察知する「中部ヨーロッパ列強は、若し非常時に「フイヒデが「一八〇〇年に既に述べたところの「自己内完結的利益領域の、又の名稱たり得る封鎖的商業國家に大休に於いて變化せしめる事が出来なかつたならばとつきの昔に滅亡してゐたかも知れ無い」

といふ事は今次大戦前の中歐に就いて民族自決が不可能だつた事實から誰も認めるであらう。從而「始と三千年の世界經濟的經驗から次の様な警告が得られる。即ち世界政治的自決力と危機を克服し得る保證を持つ事の出来るのは、尠くとも非常時及び緊迫せる世界情勢下にあつて、自給自足の根柢を守りつつ、變り無く自己維持が可能であるが、或ひは可能となる時においてのみである」

日本人と雖も凡そ今となつて此言を疑ふものは無からう。唯これを數年前に「豫知」し、即ち治に居て亂を忘れず、かゝる所に地政學は他國國防學的領域がある一警成しつゝ戰敗國を導いた其處にはドイツ國民として將又學者としての意義ある所以を見出すだらう。纏て「行きつづまらう」自由主義の運命、だが未だ此俗説の盛なる歐洲の唯中に、國家の自主、自立に忘却すべからざるに商業交易的要素と自給要素の配分であつて、此爲めに凡そドイツの國際關係の限度と自制を考察しつゝ地政學は論鋒を更に進める。

「より高い、よい安樂な生活を維持し度い欲望（自由主義はこれが英國流の生活觀、國家觀にまで理屈づけられたにすぎない）から来る利潤追求の爲にこゝうした自給の根柢を捨てた時には餘々多く、世界政治的依存性の不幸なる貢獻物を支拂はねばならなくなり、終にはあらゆる國防能力、自尊心、民族及び大丈夫の威嚴を失ふに至るであらう」空前と國際關係中に此無用、放恣な極端なる利己的理由の存する事を辨知し、不純の國際資本主義に一矢を放つのである。

「こうした經濟人は絶えず、自由貿易と營利の自由監督と警察からの自由、あらゆる秩序慣習からの自由を求め人間である。斯う云ふ人間にとつては投機とか、偶然的利得、一獲千金の富財の獲得の無い公共的取引といふ思想は全く矛盾以外の何者でも無いと思はれるのである」

「フイヒテと云つた將に來らんとする計畫經濟や統畫經濟を暗示し全體主義、公共公益の尊重、經濟と倫理性を考へる事に地政學は一要因を置いてゐるのである。此自給的封鎖經濟は如何にも「一世紀前の古い」者にはちがひ無いが、それが望まれ妥當性を帶せしむる程に「自由主義の專横」は時代を逆行せしめたものなのである。即ち

「こゝからして瞬間的欲望充足に提はれ、將來の長い確保を問題にしないあの無思想が發生し、從而常にたゞ現在の困窮を乗り切らうとするだけで百年の計をもたぬ政策が展開されるに至るのである」と

「フイヒテは考へた」

「ストイエ」

のであるが果せる設計畫と統制の經濟の必要が到來したのである。持てる國の英國、米國、佛國にすら「不安」が存して「持つ憊み」「保有」の問題は其々に經濟人の營利追求と自己利益第一主義の一つの疑問を抱

くといふ工合に、經濟といふ場面から不安、氣迷ひといふ心理場面に事態は推移したのである。地政學は常に、客觀的ありのままの外的可視的なるもの考察に留らざる此不可視の考察にも役立たねばならぬのである。此人間の心理、地上の地位にまつはる惱みは人間が單獨に人間に留らない所の何處かの國人であり、民族であるといふ事にあるので最早論理と抽象知のみでは解し能はざる謂は、個性の自覺にあるのである。

地政學がかゝる心理研究といふものを極めて重視する事は其特色で抽象的な「概念の遊戲」で無い「生成流轉の現實」からの取捨が取扱はれるのである。だから「西歐主要國が政治的優勢を持つてゐる爲めに、原料輸入を確保でき、しかもこれに對し完全な對價物を提供する必要のなかつたためである。ヨーロッパの福祉は諸多の世界を全く傍若無人に利用した事に基礎を持つてゐた。丁度北米の優勢が世界大戰時にヨーロッパからの搾取的利得によつた如くである。」と眞正直に歐洲地産の不足を是認し、アジア其他の植民地の貢獻を痛感するのが又地政學なのである。香港と阿片とを引かへた英國の如き此の學の前には全く面目は無い。だから英國の資本主義、帝國主義御用地理學のみに止まつてゐる状態に對して

「近代では世界貿易の制覇を望んでの、從而、全く自然的であるとは云へない他の努力が發生し、同時に兩國國家（佛英）の非自然的な植民地領有が登場して來た」

と英國流の地理學には一見是認し得る英民族の分散形式と領土擴張と對立して、此地政學が眺めた其の所謂自然地理的發展の無理由、換言すれば英國の人爲的發展の地理的法則上との違反を指摘して

「かくて兩國佛英民族の國民的憎惡が起り、兩民族に究極に於いて一元化、昨年英軍の敗退に際して發

せる英國の英佛共同國家論の如き」さるべき運命を持つてであらう故に愈々熾烈なものであつた」

フイヒテ

と云ふ實に今日を見透す先見の明も發せられるのである。近刊の「獨逸國防國家体制」ドイッ大使編輯には此英佛の政治經濟的「慣れ合ひ」に就いて記する處は又地政學上背景に當るであらう。即ち換言すれば「例へば、イギリスの島は本來、佛蘭西の陸地圖の一部分をなしたのである。地質的にも歴史的にも」此際、争ひはた、陸地國の支配者が島嶼を支配するか若しくは強力な島嶼の支配者が其支配權を陸地國の上に擴張するかと云ふ點に存するばかりである。」と觀察すべきで共に一時的軍事的成功は此際地理上は問題にならぬ事を説いてゐる。此意味で今回のドイッの英本土上陸をヤカマシク叫ぶのは凡そニュース上のナンセンスである事は明白である。何となれば先づ「大陸を堅める」事こそドイッの大陸制覇の由來を正すものであらうからである。こゝにも「ドイッの國防」學としての地政學が存したのである。地政學は斯くして讀者に新たな一問を試みるであらう。

「讀者が若し前記英佛二大植民帝國の運命が「兩處並び立たず」と云ふ事を是認するなれば此英國が植民政策上佛國に勝てる事實について如何なる事態が登場するや」と

「英國は印度半島を獨占しフアンシヨダに勝利を博しスエズ運河を獲得し、馬來を得て、曰く何何何」と其榮譽と擴大のみを覺え書きしたり、反對に佛國の敗路や保守態度を指摘するに止まる事は從來の地理學の任務とすら考へたらう。「勝てる跡をつけ、負ける原因を鮮明」にする時に啓明なる讀者と稱し得る。が單に心理と同情は婦女もするであらう。又、外交史上に麗々しく簡條書きをする學者もあらう。ドイッ地政學

の帖面には

此の世界各地域を植民地に編入する強さが、眞に島國の強力さなのかと冷やかに考へる。歐洲大陸の代理者たる資格は英が持つてゐるにあらうして、大陸側の不和にあるのだ。ラインの守りはローマ以來千古不磨の筈である。國境は動かぬ。

動かし得るのは「英國の國境はラインにあり」との言葉である。と斷じる。

ドイッの地政學上、今次戦上劃期的重大さを持つ者は對佛停戰協定である。佛領土席巻を自ら放棄して、一見曖昧なる協定を結んだ底意は、實に又一大陸の支配一たる地政學の教訓を恪守したものである。

と果實を握るであらうか。假にド・ゴール派と雖も此無暴を超えた馬鹿の沙汰はやり相で無からう。佛、英米各々強弱にかゝらざる「歐洲の前途」と云ふそのものが偉大なる幻影となつて今彼等の眼前を蔽ふて無爲たらしめてゐるのでは無いか。だからこそ英國は對ソ援助といふ形式で夫れもイランやイラクの或ひはトルコの現状維持をたてるのである。蓋しソ聯の絕對優勢は「ドイッに勝る」英國の脅威となるであらう。何となれば「ドイッのソ聯地方勢力の合併」を今拒否しつつある事實が夫れを證明しやう。然らば英國は何を求めつゝあるや、曰く「現状維持」。強ひて類型を學ぐれば「獨ソ戰長期化」位であらうとドイッ地政學はステ科白をしやう。閑話休題

讀者は、國際關係の證明を要求すると前提したから筆者は地政學の一端を披瀝したが、偕此地政學は「現状打破」獨ソ戰非長期化、或ひは長期化に代位する者の出現」而して之等は圖上に可視的な力とならぬであらう遙かな、東亞の大勢、ユーラシアの態勢その者に取かゝるのが使命である。筆者次は「ソ聯東方政策と彼れが典據たるユーラシア大學說」を記し尙地政學を語るべきだが紙面の都合で擱筆する事にする。

# 物價問題に就いて (講演要約)

文學博士 高田保馬

これは去る七月、本學専門部第二部報國團經濟研究部主催の下に行はれた講演の要約で、文中にもある如く「物價問題を語ることは、戦時經濟を語る」として、種々戦時經濟に就いて御説明があつたが誌面の都合上物價に就いてのみ抄録しました。この點講師高田博士並に讀者の御許しを御願ひ致します

申すまでもなく物價問題は、決して今の戦時經濟の問題の全部でもなければ、又ある意味で中心の問題でもないであります。併し乍ら戦争に入りました一つの國家が、その戦争に於て困難なく、而も戦争の目的に叶ふ様經濟を運営しようとするれば、矢張りどうしても物價問題を一つの方針に従つて處理せざるを得ないのであります。その意味に於きまして今日物價問題といふものは決して軽くない問題である。加之この物價問題は斯くの如く中心問題ではないのであります。その關係をもつ方面は戦時經濟の全面に亘つて居ります。従つて物價問題を語ることは同時に戦時經濟の全面を語ることである。斯ういふ事が云へるかと存じます。

先づ最初に私はこの物價問題が大体如何様に考へられて來たか、といふ事を簡単に述べてみようと思ひます。事變に入ります當時からであります。御承知の如くそれまで約十億づゝの赤字公債が發行されて居つ

たが、それで猶物價騰貴の危険を免れ得なかつた。然るに事變以後一年に五十億乃至七十億の戦争に基く赤字の公債の發行が已むを得ざる事情にあるといふ事であれば物價の暴騰から悪性インフレーションの來たる事は必至である、といふ議論が一般に信せられてゐたのであります。

それをたゞ一つの例について申しますれば、御承知の如く歐洲大戰の進行中又はその後に於きまして、色々の國に於ける物價は相當高くなつたのであります。アメリカに於ても、日本に於ても、又イギリス、フランスに於ても、而してドイツとロシアに於ては最も顯著でありました。而して日本の國力に比してこの度の事變に於ける財政上の支出が、極めて龐大であると考へられますに及びまして、これらの諸國に於ける如く要性インフレーションは恐らく避くべからざるものであらうと云ふ印象が、朝野をあげて支配したと申して差支へなかつたかと存じます。而して斯ういふ議論が如何なる根據に基いて主張されて居つたか、言葉を換へて云へば、戦時物價の騰貴は何故に必然であるかといふ問題であります。それを中心として今日の物價問題を考へて見ます。

それでいよいよ話の中心にはひる譯であります。先づ第一に問題となることは、つまり購買力の吸収に於て政府が物價を騰げないといふ方針を貫徹し得た

あらうかといふ事が一つの問題であります。これには二つの話の仕方をなさなければなりません。

假に物の側が動かないと假定します。生産の擴充がなければ生産の増加もない。斯様な假定の下に政府の物價政策が如何に動いたかと申しますと云ふまでもなく購買力の吸収であります。そこで政府はどういふ考へ方で進んで参りましたかといふと、一年に政府は事變のため費用を五十億圓「赤字公債」を以て賄ふのである。従つて日銀からこれだけの資金が政府の手に入り政府これを國民に撒布する。つまり國民の所得は五十億だけ増すのである。この五十億といふ金を使はんで貯蓄してくれば、政府から出た公債は日銀の手を通り一般銀行にはひりまして、こゝである意味の消化がされる。而して日銀から出た金は、再び日銀に還つて來る事になるから、民間に撒布された資金が残らない事になり、物價は騰らないといふのが大體政府の方針であつた。又斯うした事が、國民に向つて要求せられた事であつたと思ふのであります。

所がどうも政府が思つた通り物價はうまくゆかなかつた。その理由は何處にあるかといふと、一つは政府のこの方針が完全に遂行せられなかつたといふ事、それからもう一つはこの方針に關する政府の對策に若干の粗漏があり、錯誤があつたといふ事である。

先づ最初に方針が完全に遂行されなかつたといふ事を申してゆきます。それは申すまでもなくこの公債の消化が完全でなかつたといふ事である。而して密殘りの公債に對しましては大抵それだけの日本銀行券の増發になつてゐるのであります。これは政府が努力してもう少し充分やれば、かゝる結果に至らずして済んだかと思ふ。斯う申し上げる事が出来る。然してこれは政府が意識しない問題ではなかつた。即ち努力足らずして茲に至つた事でありませうから、この点について歴

代政府の金融當局者は知識が欠乏せりと申せないのであります。

併し乍らこの方針を完全に遂行致しましても尙物價は騰貴せざるを得ざる情勢にあるのである。それは申すまでもなく斯ういふ点であります。

政府が五十億だけ資金を撒布しましたなれば、それだけの新しい所得、つまり吾々に購買力が出来るといふのが當局者の方の憤である。當初から政府當局者は斯ういふ事を考へられてゐたやうであります。今日の大體の定説として考へられてゐる事は、五十億の資金を撒布すれば幾ら國民所得の増加があるかといへば、それに8分の一を掛ける。これがセイビング・レートと所得の関係であります。つまり吾々の所得を節約し、また率が半分であればセイビング・レートは二分の一である。従つて假りに $100$ としますと、 $20$ と $100$ 斯ういふ結論を生じて來ます。若し國民生活の勘定に於てセイビング・レートがもう少し大きくなればその百億の金もつと少さくなります。正確な數は勿論判る譯ではありませんが、歐洲を濠洲、さういふ所の例によつて判断しますれば、恐らく一・八或は一・六といふ位の數字がつまり8分の一のプロバブル・ヴァリユでないかと考へられる。この意味に於て五十億の支出があれば、國民所得の増加が五十億以上になるといふのが根本の憤みでありまして、碎いて申しますとバラ撒かれた五十億の金は財布をぐるぐる廻轉致しますから、その間に吾々の財布の中を温めてゆく。従つてくる／＼廻る間に國民所得がいくら増加するといへば、今日の結論として大體8・セイビング・レートを以て一を割つたものであるといふ考へ方をして居ります。この意味に於て政府の公債消化とその方針が完全に實行出来ても、それだけでは物價を抑へる事は不可能な筋合によつたのであります。

最後に物價問題に就いて若干目標をつけておきたいと思ひます。

この物價問題といふのは、御承知の如く財政、殊に公債の問題と密接な關係をもつてをり、多くの人も屢斯ういふ事を云はれて居ります。

私は今日ある金融關係業者の集りで、利子は將來と云ふなるかといふ事に就いて意見を質された。この時私は利子は上るかも知れない、殊に戦後ある種の不景氣がくれば利子は上らうとするでせう。然し現實には上りません。何故かといふと政府は現在三百億以上の公債をもつて居り、茲、二年の間には五百億にも達するであらう。現在金融機關の支拂ふ利子は略三分見當であるが、これを三分五厘に引上げたら従つて公債の利子も高くなり、政府にとつて莫大な負擔である。又金利を上げるのと新規の公債を發行してその支拂に充てる事になるから、斯ういふ事はしないだらう。だから金利を上げる事はまづあるまい。これが大休私の答であります。然しこれは余りに確信を以て聽かれる程の自信はない。それで座談的に申しました。

それで公債三分五厘の金利は上らないと想像しますが、然し假りにこれが下つて三分になつたとすると、五百億の公債の利子は約十五億であります。今日の日本の財政で正常収入を以て十五億の公債の利子の負擔は先づ出来ない事である。そこでこの負擔を切抜ける途は何處にあるかとなりますと、それには二つのポツシブル・ウエーズしかないのであります。尤も考へ方によると三つあるとも云へます。

第一は、イギリスが第一次歐洲大戰後致しました様な健全な財政を以て乗り切る事である。然しこれは日

本の國力を以ては相當困難な道であります。もう一つの行き方は決して日本の踏まない道であります。これはドイツのインフレーションの道であつて、公債を反古にしてしまふ道である。日本の國家が全然夢にも考へてゐない道である。この点でフランスは中間の道を歩きました。即ち平價を切り下けて五分の一にしました。五分の四だけ借金の踏倒をしてあとは國力に應ずる組織を以て財政の建直しをした。

日本の將來はどうであらうかとなりますと、勿論フランス程の難局であるとは毛頭考へない。が大休今日の物價をもう少し下けてこの戦後を乗切る事が出来ると思ふ。物價は今まで少しづつ騰つて來たが、今後は必ず騰るかといふと、必ずそうではないと思ふ。といふのは國家の消費も、私の見た所では、既に峠を越したのではないかと思ふ。私共は物價が今まで通り必ず徐々に騰つて行くとは考へない。むしろ國家の方針如何によつてこの邊で物價を食止める事も必ず困難でないと思ふ。

勿論私は斯ういふ事も否定致しません。物資増産のための値上げ、補助金交附、又それらの爲に物價が騰貴するといふ議論も出て居ります。これも私は否定致しません。然しあるものにあつては今や徐々でありませぬが物價を抑へる傾向が實は現はれつゝあるのではないかと思ふ。それを裏からみれば、景氣は今や絶頂を通り越してある意味に於て下火に向ひつゝあるのではないかと思ふ。この意味に於て物價の騰貴は悲觀ばかりすべきものではないと思ふ。若し政府がある一つの方針を採つてゆくなれば物價を抑へる事は可能なる事であり憂ふるものではないと思つて居ります。

甚だ取止めのない事を申しましたが、略私的時間も過ぎましたのでこの邊で終ることに致します。





校友

神戸會長初め二教授  
金澤市に講演

来る九月十四日金澤市に於て舉行される北陸三支部  
横斷聯盟結成式に當るのでその記念講演會講師として  
本部より會長神戸正雄博士、常任幹事森川太郎教授、  
川上敬逸教授に依頼するに決したが、同日の演題左の  
通り

- 國土計畫に就いて 神戸正雄博士
- 英米の經濟政勢と我が經濟態勢 森川太郎教授
- 海洋自由の限界 川上敬逸教授

なほ前日十三日は福井支部に於て同支部主催の時局  
問題座談會に出席の豫定である。

北陸三縣横斷聯盟  
結成準備會開く

前年來石川支部の主張による北陸三縣關西大學校友  
會支部横斷聯盟結成の企圖は其後福井、富山兩支部の  
賛同を得て完全な了解にまで達したので六月七日午後  
五時より石川支部主催により第一回聯盟結成準備會を  
開催した。

會場は天下の名園兼六公園の第一の勝區と云はれる  
孤草池附近に南面する三芳庵水亭、參集の會員は古  
雅を以て誇る古蓮池時代の茶堂夕顔亭で福井、富山  
兩支部代表と會見、薄暮近くまで好事を盡せる茶室  
内外の風物を親しんだ。

名工後藤程乗作の彫彫手水鉢、竹根化石の手水鉢、  
征韓役後秀吉公より藩祖利家公におくられた海石塔  
など、或は階前にそへり立つ岩磐に珠簾垂れる翠濤

の壯觀に接しては浩然養氣一心一體ともなつて、初  
對面の禮交される中に母校在野の一團體としての本  
聯盟結成の目的を明かにし母校と表裏一體となり新  
體制下に於ける校風刷新の一大翼實事業に参加邁進  
する覺悟を固めたのであつた。

午後六時餘め設けられた三芳庵別樓水亭に着席、主  
催者側石川支部谷口支部長病氣缺席のため副支部長木  
村佐太郎氏開會に先立ち石川支部を代表して聯盟結成  
の意義を述べた挨拶があつた。續いて司會者の合圖に  
より一同起立敬度裡に 聖壽の萬歳を祈念し奉り、戰  
病死者の英靈並に第一線將兵各位に對し感謝の默禱を  
捧げ且武運の長久を祈つた。次いで富山支部代表常任  
幹事安田倫藏氏より同支部長磯野充賀氏の、又福井支  
部代表副支部長福原金二郎氏より同支部長内藤哲應氏  
の石川支部の木輪盟結成への斡旋努力を謝する意の挨拶  
あり、將來臣道實踐のため北陸三縣下校友が一丸と  
なつて邁進すべき旨を誓はれた。

茲で司會者は豫て賛同を得た如く本日の會議を圓卓  
式となすべき旨開陳、終始談笑裡に諸般の報告、申合  
せ事項など決議して記念撮影のち午後九時三十分閉  
會和氣霽々裡に奮起を誓ひつゝ握手を交して解散した  
のが十一時半であつた。

◆申合せ事項

- 一、本聯盟規約の起草は石川支部に一任のこと、
- 一、本聯盟結成に關しては結成大會を開く事とし左  
の方法に據る。
- (1) 結成大會は金澤市に於て開く (2) 大會開催の際  
しては母校に交渉の上目的を定め神戸學長の外有  
力なる講師を招聘して當日記念講演會を開く (3)

大會の日時及場所等は石川支部に於て決定する  
(4) 前項により大會の期日を豫定したるときは遅滞  
なく福井、富山兩支部に通報し、事前打合せの上



北陸聯盟準備會

兩支部代表者と同行上阪して母校に交渉、學長並  
に出演講師の確定を爲し期日等本格的に決定する  
(5) 會場の整備に關する一切の設備は石川支部に一



任のこと。

以下三項目である。

なほ當日の出席者左の通り

(福井支部) 福原金二郎、(富山支部) 安田倫藏、(石川支部) 木村佐太郎、松永善光、田中健夫、木村仁吉、越田宇一、山越外吉、中西興七

### 奉天支部總會

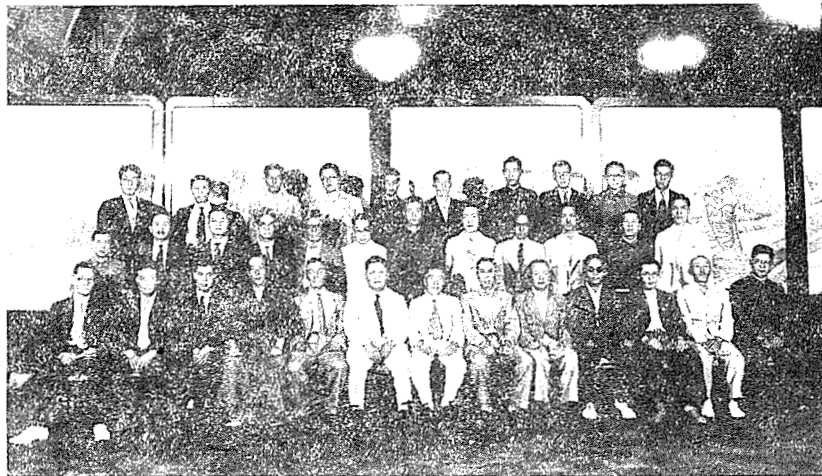
久しく總會開辦の機を得なかつた奉天支部は在住校友諸士の熱望と盡力とに依り七月十九日午後六時より奉ビル七階會議室に於て支部總會を開催、増谷支部長を始め各幹事はもとより沿線の鞍山、昌圖、鐵嶺方面よりも校友を致来會あり、夫々母校へ送る寄せ書をしたが、稀に見る盛會に一同益々結束を固くするところがあつた。

開會に當り日滿兩國旗に敬禮のち出井幹事長の熱意溢るゝ開會の辭及び支部設立以來の經過報告があり續いて増谷支部長より懇篤な挨拶があつて、會則改正新役員決定を行ひ一同記念撮影のち懇談會に入る。會の發展向上と母校との連絡、支部月報の發行、校友相互の結束連絡を緊密にすべく集會の回数を増し相互扶助を以て時局下職域奉公の誠を致さん事を誓ひ左の如き提案事項の審議をなし各々意見を開陳することゝあつた。

一 會則改正の件、二名簿作成の件、三會費及基金の件、四會報發行の件、五月例會其他集會に關する件、六會名及會旗の件、七慶弔に關する件、八教職員、學生來奉の際の件  
それより自己紹介に移り、社長も重役も新卒業の若い者も皆學生時代にかへり和氣霽々の内に各人の抱負と所感を胸襟を開いて語り合ひ、實に感激と歡喜に満ちて和やかに而も有意義に最後まで關大スピリットを

發揮して終始した事は嬉しい極みであつた。

五島幹事最後に感激そのものゝ開會の辭を述べ一同



〔(下)寄せ書と(上)眞寫念記〕會總部支天奉

學歌を合唱し壙澤顧問の發聲で萬歳を三唱し名残りをおしみつゝ思ひ出深き總會の幕を閉ぢたのは午後十時過ぎであつたが奉天に於ては誠に稀に見る盛大な會合であつた。

當支部は滿洲の中央に位し會員多數を擁する故滿洲國に於ては率先して新京、關東州の各支部と連携し以

て關大校友發展のために大いに奮闘せんとしてゐるが會員中直吉幹事より特に會旗の寄贈申出であり、其他會員より支部基金の寄附申出もあり愈々意を強くしてゐる。

尙當日の出席者は左の通りである。

- |       |       |       |        |
|-------|-------|-------|--------|
| 増谷 憲信 | 出井 巧  | 五島 守  | 直吉 巳一郎 |
| 徳田 高二 | 戸倉 専三 | 墨田 一男 | 牧野 秀夫  |
| 廣瀬 勇  | 余原 年末 | 池永 正徳 | 上岡 清道  |
| 多久 正克 | 辻 菊雄  | 寺町 太郎 | 野村 朝一  |
| 中村 義雄 | 稻經 新一 | 村上 善  | 辻 順次   |
| 鈴木 克己 | 壙澤 一郎 | 浦谷 武男 | 依藤 一秀  |
| 松山 幸嗣 | 坂口 了  | 上野 勇  | 篠田 忍成  |
| 古賀 進  | 西川 俊賢 | 河相 保知 | 結城 丙太  |
| 三水 嘉平 | 池田 正雄 | 野田 義人 |        |

Handwritten notes and signatures, including the date '昭和二年七月十九日' and '奉天支部'.

支部役員

支部長 増谷 雲信 幹事長 出井 巧  
 幹事 直吉巳一郎 五島 守 寺町 太郎  
 黒田 一男 西川 儀貫 牧野 秀夫  
 藤田 忍成 金原 年未 山下 保  
 問 石田 環 徳田 高二 田村芳太郎  
 尾深彌一郎

支部八月例会

總會に於て例会開催決定により第一回を八月十一日午後六時より奉ビルグルに開催したが當日も二十六名の出席者を得て甚だ盛大であつた。この盛大さを永久に持續させたいと幹事一同ヘリキツテあるが、それにもまして段々校友のお互が親しくなつて行くのが嬉しく思はれる。

當日出席者は左の通りである。  
 牧野、五島、中村、寺町、堀江、生川、奥谷、落合、中村、村上、長崎、池永、出井、西本、黒田、結城、多久、松山、山下、直吉、石田、横山、岩佐、米田、上岡、浦谷

秀麗會の記

關東州支部

七月十八日秀麗會第六十三回例会を寺内通りの海務協會に開催した。會するもの十六名最近の例会が常に十五名以上の出席を持續して居る事は一に會員諸氏の愛校心の發露であると深く感謝申上げると同時に最大限の努力を拂つて尙且つ十名以下の出席状態だつた過去を懲り轉た感慨深きものがある。

本月も新會員川端雄吉君を迎へて秀麗會は肥る一方

頗る謙遜的な同君の自己紹介が終つた頃は矢張り場所柄御馳走(眼の中に入れても痛くない程小さいお魚である)を前にして話題はやはり色々盛り上げられて行く。

ドイツはこの前の大戦に於て食糧不足の苦しみをいやと云ふ程味はつた。殊に蛋白質の不足は文字通り骨にこたへた。そこで今度はこの蛋白質の缺乏を水産物に依つて補ふべく想到しあのノルウェー電撃戦となつたのである。

ところが海の資源に恵まれた世界有数の水産國日本はこの貴重な水産資源を何ら活用しようとはしない實に遺憾な話である。水産物は農産物の様に危険がない。無限に捕獲出来るのが海の資源である。國民も當局も今少し之れを重視して食糧問題に對する確固たる方策を樹立しておかねばならぬ。

戦争と食糧問題を例にとれば以上の如くである。相變らずの談論風發、終りに學歌齊唱散會したのが九時前であつた。

當日の出席者

高濱、室山、守谷、秀島、川野、山下、北條、黒田、松田、基原、平井、寺田、豊永、木村(逸)、川端、竹若、以上十六名。

第七回神宮參拜

朝鮮支部

本年二月以來毎月初の日曜日に朝鮮神宮早朝參拜を行つてゐる朝鮮支部では八月三日その第七回目を舉行午前七時朝鮮神宮參集所に集合の上會旗を先頭に參拜して、皇室の彌榮と出征將士の武運長久を祈願し、併せて本會員中の出征者に參拜者一同慰問の寄せ書を發送した。

參拜後清々しい心地で一同南出亭のパンとコーヒー

の茶話會に出席、樂しく懇談九時過ぎ散會した。

當日參拜者二十二名左の通り。

岡本 至徳 大塚 明 野田 博 都築泰二郎  
 岩崎 義二 秋山 雪大 近藤 薫 吉本 悌  
 吉本 肇 日下部景勝 松田 清 高橋 伊平  
 江藤 榮七 山田 壽男 三上 吉隆 信田 芳  
 石崎 儀二 曾根 三郎 尾原 東成 福地 壽三  
 吳 健 川島 通利

蒙疆支部懇親會

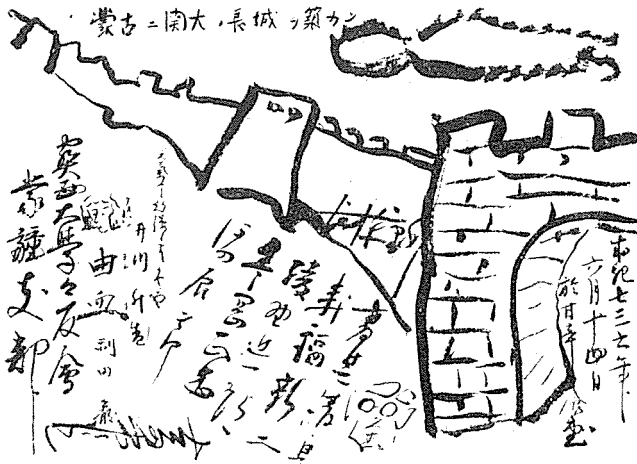
六月十四日午後七時より張家口甘辛食堂に於て張家口在住校友の本年度第一回懇親會を開催したが、遠く蒙疆方面に活躍する校友の意氣は物凄く、母校を憶ふ念は支部結成の努力となつて現はれ左記申合せをなした。

- 1 蒙疆在住の校友を打つて一九とする支部を結成する。
- 2 支部事務所を張家口市武城街、加藤物産内に置く。
- 3 毎月二十五日午後七時より張家口、大同、厚和、包頭など各主要都市にて夫々校友相集ひ會食すること。
- 4 前項の例会を「二十五日會」と稱す。
- 5 二十五日會の模様及び校友の動靜などは毎月支部へ報告すること。
- 6 七月一日を期し在蒙校友全部、校友會本部へ會費參圓を納むること、し六月末日迄に支部宛送金のこと。
- 7 校友名簿作製のため現住所、氏名、卒業年度、科別、勤務先又は職業、電話番号等を支部へ報告すること。

以上申合せの後記念の寄書、撮影を行ひ盛會裡に第一回會合を閉じた。

當日出席者は左の通り

- 高志 清貞 河田辰次郎 長棟 重利 副田 敏
- 井川 升盛 久米 修身 吉田 一郎 綾野進一郎
- 豊岡 正忠 高橋 良則 藤福 新一



書せ席の部支強強

### 月例會開催を決議 上海支部

六月廿八日開催せられた上海支部春季總會に於て月例會開催を決議したが、この程その實行案が出来上つた。

一、月例會を交路、日本俱樂部に開催

二、時日は母校創立記念日十一月四日に因み毎月四日とし午後零時三十分參集のこと

なほ改選による新役員左の通り

- 支部事務所 上海黃陸路敬德坊十九號 辻野方
- 支部長 忽那文治郎 幹事長 辻野文治
- 幹事 梶川多三郎 富田英雄 福富重治
- 大森元二 細川末藏 平澤農一
- 高木鐵男

### 大阪市水道部支部總會

霖雨煙ぶる六月二十五日午後四時より十六年度第一回總會を時局柄コロヒとケキで開催、出席者三十名 新入會者の自己紹介に引續き二、三、會則の變更を決定後役員改選を行ひ最後に幹事より母校の近況報告あり、午後六時支部本年度の更生と發展に努力することを申合せ散會す。尚當日決定の役員左の通り(田中報)

- 支部長 中村 泰音 副支部長 合井 元藏
- 顧問 海北 半平
- 幹事 庶務課 工藤源治郎 横井作五郎
- 業務課 吉田 明 鹽崎 吉彌
- 配水課 森本 重道 磯島 得一
- 上水擴張課 藤井 元巳 日羽 彰
- 料 金 課 毛利久三郎 松本 光雄
- 下水建設課 百武 通雄 竹田 武雄
- 下水管理課 吉田 廣三 小寺 辰藏
- 會計幹事 中辻 淳 田中雄治郎

### 政交會創立會

一、豫ねて本學の學としての中樞的推進力として、而かも關西に存在する大學の綜合的國家理念御奉公の主

要なる役割を果しつゝ、東部の諸大學に對照し相當なる發言と位置を堅持する我が法文學部政治學科は本大學の大學令による大學として風蕩る千里山の原頭に法學部政治學科としての創設の昔より相當數の卒業生を世に送り之に依り社會各面に幾多の人材を輩出したのであるが、今回卒業生間に皇紀二千六百年の民族的回顧と一心の友愛の感激により茲に縦の連繫を圖り之を組織化することにより母校及恩師に對する追慕と會員相互間の親睦及其依存を意味する反省のもとに先づ吉田奎文、安富敬作、石井庄逸等十數氏が六月二十三日夜吉田氏邸に會し本會設立案の打合せ會を開會した。

二、仍つて愈々七月十三日午後六時道頓堀いま堂樓上に於て發會式及懇親會を舉行するに至つた。同日定刻會員大多數の委會を得て先づ國民儀禮を行ひ終つて發起人を代表して吉田奎文氏より挨拶と本會設立に至る經過報告あり、安富敬作氏より會則案の提議ありて滿場一致を以て之を可決且つ承認し會則に基き政治學科創設以來主任教授たる岩崎那一教授を名譽會長に推し同教授の指名に依り左記の如く會長及委員を推薦又は委屬したり。

- 會長 吉田奎文、委員 清家唯一、牲川敬一郎、安富敬作、鎌田爲市、谷口新太郎、石井庄逸、鈴木敏雄、富川一男、朝田良一、平田榮福、萩野操、江原守、中野由藏、木村滿、岩本公夫、稻野治兵衛、笹井英夫、山内嘉八良。(〇印は常任委員とす)
- 續いで岩崎教授及列席の本學庶務主任松崎義盛氏より祝辭を兼ねて本學の現在及將來に亘る輝く發展の盛況事情を拜聴し感激の裡に發會式を終り懇親會に移るや新しきは今春、古きは約二十年前の學生時代に還元し歡談の時を忘れて思出話に花を咲かせた。

三、當日遠隔の地或は職務上の止むなき事情にて缺席した人々も書信若は電話にて發會を祝し激勵し來る。殊に時局柄〇〇の勇士が〇名も來會し來れるありて一

同非常に感激し祖國の御旗に連署し其の目出度き前途の引出物として献じた。學歌及學生歌を齊唱し道頓堀の夜も人漸く疎らとなる頃散會するに至つた。

當日學長、教授及大學の事務當局の方々より町重なる御書面を頂いた。

四、尙本會の事務所は現在大阪市北區堂島中一丁目四番地安富敬作氏方(電話北三七七七)番に設けることにした。

當日の出席會員は左の通りである。(發起人報)

出席會員

- 吉田 奎文 平田 榮福 澁川 正道 清家 唯一
- 荻阪 操 木村 謙 佐川敬一郎 八坂 利武
- 松尾 府 安富 敬作 原田 三郎 岩本 公夫
- 坂野 章夫 松田徳二郎 千田 茂治 大杉 輔二

五線會夏季例會

關大五線會(昭和五年大卒同窓會)夏季例會は丁度御盆に當つた爲か出足が鈍つたので幹部會とし八月十四日午後六時より大鐵百貨店日本別室食堂で開催同期生の府外事課警部補古川親若其他から座談會の形式で時局に對する心構えを話し合ひ一段と職域奉公を誓ひ合つたことであつた、當日出席者は岩田浩太郎、中尾省三、寺下勇、古川親、鈴木武雄、の五氏である。

清和會

大正十四年專門部法經商各科卒業生を以てなる清和會では八月三十日午後五時半、東區眞差町の瓢亭に會員佐伯三郎氏の母校教授昇任祝賀會を開催したが、出席會員は逐年その地位を向上し夫々の職業に於て中堅以上に進んで何れも指導階級に在るので懷舊談、苦心談等胸襟を開いての談話は盡きず、少人数とは云へ頗る盛會であつた。尙宴前會員巽千代造君(滿洲第二十一部異隊々長)に書信を連名で發送、武運の長久を祈るところがあつた。

- 出席者 佐伯三郎 前川信之助 松本孝 北田康民  
竹林直信 横田敬治 梶 榮 岸田駒太郎  
安田清治郎

會員消息

- 阿部 正三 (昭十二專二經) 旭區野江西之町二ノ四に轉居
- 穂田 定治 (昭五 大法) 東京市小石川區日ノ丸製作所に勤務、住所は同市瀧野川區西ヶ原町八二七、朝日莊内
- 井上 敏夫 (雜) 南區八幡町九に轉居
- 井上 力 (昭六 專經) 丸柏紙業會社に勤務、住所は以前の東區博愛町一、丸柏紙業會社内
- 池田 忠雄 (昭十三大 送) 大阪府警察部建築課より玉造署に轉勤、住所は同前

- 稻本 英一 (昭四 大法) 京都トヨタ自動車販賣會社に勤務、住所は京都市東山區五條橋東六丁目
- 池原 正己 (昭十二大 專法) 任警部補、大阪府特高檢閱係より旭署に轉勤、住所は東淀川區田川通三ノ二三
- 大伏 巖 (昭四 專二法) 貝島炭礦瀨野蓄場より西區川口町一五、同炭礦會社大阪支店に轉勤
- 入江 寅一 (昭六 大法) 岸和田市岸城町一八九七に轉居
- 岩井幾三郎 (大七 專商) 東京火災保險會社大阪支店より同社福岡支店に轉勤、住所は同市島飼町三ノ一九八ノ六
- 宇治田尙敬 (昭十一大 專一經) 大陽生命保險會社大阪支店より福田桑商會社に

- 轉職、芦屋市芦屋山下二一三二七に轉居
- 上田 好雄 (昭十六專二法) 東區味原町六六に轉居
- 上西 一義 (昭十 專二法) 和歌山市本町八ノ六、樋口方に轉居
- 上部富士夫 (昭十三專二法) 京都貯金支局庶務課に勤務
- 浦谷 武男 (昭十六 大經) 奉天市鐵西區中央街一段三九、永田アパート三號に轉居
- 江口 澤美 (昭十三專一商) 關西化學工業所徳島撫養出張所を開設し所長に就任、泡沫式消火器、特許昭和唧筒代理店を兼營
- 尾崎 正三 (昭十二專二經) 住吉區松虫

- 通二ノ一二に住居
- 尾下 瀧雄 (昭八 大法) 福家鐵工所に勤務、住所は以前の此花區西九條上通一ノ四〇
- 尾花 春雄 (昭十二專二法) 兵庫縣武庫郡大庄村東大島大上合四七に轉居
- 大塚、重延 (昭二 專法) 兵庫縣武庫郡魚崎町字下松原七三二ノ八
- 大月義平二 (昭廿四 法) 司法省少年保護局より少年審判所へ轉勤
- 大西 修 (昭二 專法) 新潟市沼垂四九五四に轉居
- 大西 富幸 (昭十三 大經) 兵庫縣社會課に勤務
- 大松安太郎 (昭十三專二法) 大阪桃園小學校より生魂國民學校に轉職

- 太田 一雄 (昭十二專二法) 西區新町通
- 二ノ二七、村上方に轉居
- 吹田市垂水
- 途坂 敬一 (昭十六專二法)
- 旭町二九ノ一二
- 勇 (天十四 專商) 昭和貿易會
- 社專務取締役に就任、通信先は天津日本祖界同社宛
- 岡井 貞二 (昭十五專二經) 三重縣多氣郡相可町東池上に轉居
- 岡部 季雄 (天十四 專經) 神戸市灘區王子町一ノ一四八
- 岡本 榮吉 (天三 專法) 株式會社榎本鑄造鐵工所に勤務
- 片桐 軍司 (天十三 專法) 大同製線會社に勤務、住所は府下三島郡高槻町櫻ヶ丘
- 河野 英一 (昭八 大法) 警部補、川口署に勤務
- 瓦谷 末雄 (昭十五專二法) 神戸地方裁判所より東京民事地方裁判所に轉補、住所は同市豊島區西葉嶋二ノ二五七〇
- 小川方
- 木村 太郎 (昭四 專商) 興亞鑛業會社東京出張所勤務、興亞産業研究所所長
- 住所は東京市本郷區森川町一一二
- 木村 與吉 (天八 專法) 七月五日付富田林務署より茨木林務署長に轉任
- 住所は從前通り
- 岸波 功 (昭十六專二法) 明治大學法學部在學、福島縣東白川郡笹原村大字川上字中平三二
- 衣笠 要一 (昭十一專一法) 兵庫縣武庫郡大庄村東大島大上合四七に轉居
- 小池照太郎 (昭六 大法) 滿洲國間島省圖們街銀河區圖們商工公會に勤務
- 小島龍太郎 (昭九 大法) 町名變更、東成區新今里町三ノ六九
- 小西 正夫 (昭十一 專劇) 加藤耐火煉瓦會社に勤務、住所は飾磨市細江
- 小西 頼人 (昭六 大法) 洲本市下屋敷乙一一五
- 小山 市藏 (昭十二 大法) 不二工業會社より大阪商業鑛驗組合に轉職
- 幸崎 一義 (天十 專法) 朝日海上火災保險會社調査課長より福岡支店長に轉任、住所は同市春吉上四十四一六三
- 五藤 謙 (昭十五專二法) 神戸海上火災保險會社上海出張所に勤務、住所は同市黃浦灘十二號滙豐銀行大廈一四四號内同出張所氣付
- 佐伯 憲三 (昭十三 大法) 港區九條南通三丁目、澤田鐵工所に勤務、住所は以前の通り
- 齋藤 忠三 (昭十五專二法) 天王寺區役所より大阪系綢商業組合に轉職
- 財本 三郎 (昭九 大經) 神戸市林田區池田上町一一四
- 清水 清 (昭十五 專英) 北區都島南通四ノ二三、第二天水莊アパート三〇號轉居
- 鹽田 忠 (昭十六專二法) 東淀川區下新庄町五八二、新庄園内に轉居
- 鹽田 好一 (昭十 大法) 天王寺區東平野町一ノ三五に轉居、大日本セルロ
- イト會社に勤務
- 重岡 恒藏 (昭四 專法) 西區京町堀通五ノ三八に轉居
- 島 真可 (天三 專法) 市域變更により西宮市上大市一本松二となる
- 白川 正實 (昭六 專法) 東區備後町二ノ二一、野村ビル五階五〇七號室に事務室設置
- 新名 馨 (昭十二專二法) 此花區春日出町三三〇ノ一一に轉居
- 須藤 榮一 (昭十三 大法) 帝國海上火災保險會社大阪支店に勤務
- 菅根 正治 (昭十一專一法) 大阪市役所保健部に勤務
- 田中 壽藏 (昭九 大專經) 日本人造纖維會社より日本レヨン會社用度課に轉職、住所は北河内郡守口町豐香町二ノ八
- 田中 義雄 (昭九 大法) 滿洲國鞍山市、昭和製鋼所骸族課に勤務
- 田村 淺一 (昭四 法) 町名變更、山口市湯田元町二ノ六六三
- 田村 格治 (昭四 專商) 東洋紡績會社神崎工場より大阪府泉南郡貝塚町澤同社澤工場に轉勤
- 田村 光嘉 (昭十三 大法) 日本航空工業會社に勤務、住所は神奈川縣平塚市新宿高梨莊
- 高岡 正雄 (昭八 專二法) 正明と改名
- 京都市右京區嵯峨野神之木町二に轉居
- 陸王合金會社に勤務
- 高橋比左也 (昭十五專二商) 川崎重工業會社本社經理部に勤務、天王寺區北山町一八に住す
- 高村 義光 (昭十三 專一法) 陸軍主計中尉に任ぜられ、東京市淀橋區戸塚町一ノ五八七、法輪寺内に轉居
- 竹澤喜代治 (昭九 大法) 堺市中三國ヶ丘町二丁三四に轉居
- 竹中 義三 (昭八 大專法) 中西義郎と改姓名、住吉區阪南町西一ノ三七、中西進重郎方に住居
- 谷口 彌一 (昭十 專二法) 南區瓦屋町四番丁二四に轉居
- 立川 通雄 (昭十六專二經) 大分市萩原五五七に轉居
- 建部 實 (昭六 專法) 兵庫縣揖保郡龍野町中震城町に轉居、龍野稅務署に勤務
- 玉井 守 (昭十六專二商) 山口縣玖珂郡柳井町柳井二九二に轉居
- 蝶野喜代松 (昭八 專二法) 東區高麗橋詰町三九に轉居
- 辻 義人 (昭十三專二商) 奉天市滿洲電機商會勤務の處牡丹江市圖明街四ノ四、同商會内に轉居
- 辻井 安英 (天十五 專法) 住友金屬工業會社舞鶴出張所より本店營業所に轉居、住所は尼崎市昭和南通六ノ一五八
- 坪阪 敏治 (昭十二 大經) 東京火災大阪支店より京都支店に轉勤、住所は天王寺區烏ヶ辻町六、以首一方
- 寺田 泰三 (昭十一專二法) 住吉區上住吉町一七三に轉居

戸田 正日 (昭四 專商) 滿洲電信電

話會社に勤務、奉天市鐵西區勸業街三

段ノ一電々社宅一八號に居住

道光 充 (昭十六專法) 宇屋と改姓

岡山縣都窪郡常盤村溝口に轉居、常盤

郵便局に勤務

富田 英雄 (天十四 專法) 中華民國國

民政府宣傳部中央書報發行所上海分所

長、新中國報顧問に就任、住所は以前

の上海北四川路新祥里二五號

友右 俊助 (昭十一專法) 東京エス・

ゲー・エフに勤務、住所は東京市大森

區入新井三ノ一四八

中川八百八 (天九 專法) 大阪府總務

部地方課より庶務課へ轉任

中桐 保 (昭十四專商) 北海道北見

國常呂郡留邊菜町野村鑛業會社イトム

カ鑛業所に勤務、同所に居住

中島 常雄 (昭六 大法) 佐賀縣山代

炭礦を退職、西淀川區佃町一六五に

轉居、阪神中島鑛造工場を自營

中塚 正一 (昭十專商) 下關市岬之

町一六六、下關水産販賣會社に勤務

中村 秀雄 (昭八 大法) 西淀川區姫

島町二一〇四

中山徳太郎 (天十二 專法) 味原小學校

より錦國民學校へ轉任

長本 元男 (明三九 專法) 小倉區裁判

所檢事局檢事より奈良地方裁判所檢事

長谷川長三 (昭六 專經) 神戸市葦合

區篠内町一ノ一八に轉居

濱口卯之助 (昭六 專經) 札幌市北六

條西十八丁目一 中通東向に轉居

東田 博雄 (昭七 大經) 大阪陸軍造

兵廠枚方製造所に勤務、住所は大阪府

北河内郡交野町字私部

東山 政夫 (昭十 專二商) 住吉區墨江

東三ノ三五に轉居

久岡 三郎 (昭十三 大法) 豐中市櫻塚

元町二ノ九八に轉居

久下 武男 (昭八 大專) 武治郎と改

名、兵庫縣武庫郡瓦木村高木字西久保

五一〇ノ一に轉居

平井 善一 (昭九 專商) 小倉市中原

東町三丁目に轉居

平尾 貞 (昭九 專法) 横濱中郵便

局長、住所は横濱市港北區篠原町一六

二三

藤井 淳二 (昭十三 大經) 吹田市濱田

町二八〇

平澤 豊 (昭十 專二經) 今回菊池平

壤憲兵隊長の嫁約により平壤商業學校

長荒木彦次郎氏次女淑子殿と結婚

藤井 政治 (天六 專法) 大阪市内に

辯護士開業中の處この程岡田地方裁判

所檢事に就任

藤井 武 (昭十三 專二經) 西宮市津門

稻荷町三七に轉居、鹽野義商店浦江工

西安縣西安、西安礦業所日之出町北寮

堀毛 清 (昭十一 大法) 朝鮮咸興府

春日町二ノ七三ノ二に轉居

前田 四郎 (昭五 大法) 奉天市浪速

通六四滿洲大倉土木會社調度課機械係

に勤務

前田 重利 (昭十三 大法) 仙臺地方棧

判所に司法官試補として勤務

牧 信清 (昭十二 專二經) 朝鮮運送會

社仁川支店より同社大阪事務所に轉勤

住所は吹田市高知通一四三一

松島 靜 (昭十一 專二法) 滿洲國三江

省日本學校組合に勤務、三江省依蘭在

滿國民學校官舎に居住

松田 尹 (昭十一 大法) 岡と改姓、

香川縣小豆郡上庄町に轉居、丸金醬油

會社に勤務

的場 武次 (昭八 專法) 東成區舍利

寺町一ノ一七に轉居

逝 去

奥林 和夫 (天九 專法) 津市に於て

辯護士開業中の處去る七月九日盲腸炎

にて逝去

蒲生 幸平 (昭十三 專二經) 逝去

彌崎 理夫 (昭四 大專法) 七月三日逝

去

柴田 保 (明三九 專法) 逝去、遺族

は西區南堀江下通四ノ三四(兼)ツヤ殿

柴田 正倫 (昭十 專二經) 逝去、遺族

は同右母ツヤ殿

田中 謙 (昭十三 專二法) 三月二十六

日逝去

伊達 惟倫 (昭六 大法) 去る七月急

逝

藤井 武雄 (昭十二 專二商) 一月二十九

日逝去、遺族は山口市大市二三、重助

殿

林 徳男 (昭 專法) 阪大病院に

病氣療養中の處七月二十五日午後六時

午逝去、遺族は兵庫縣武庫郡武庫之莊

女 朴婚殿

横納 美義 (昭十四 專二商) 昭和十四年

七月逝去

増村 義夫 (昭十 專二商) 逝去、遺族

は堺市北清水町三丁一三六

松尾 七郎 (明三九 法) 四月二十三

日逝去、遺族は奈良縣宇陀郡松山町、

秀郎殿

山岸 一良 (昭十三 專二經) 四月十八日

逝去、遺族は堺市西湊町四ノ二三五、

與逸殿

和食 進 (昭十 專二法) 本籍地に於

て逝去

改 姓 名

昭三 大專法 竹中 義三 中西 義郎

昭八 大專法 久下 武男 武治郎

昭十一 大法 高岡 正雄 正明

昭十六 專二法 松田 尹 岡

道光 充 守屋



校友會費拂込者氏名

(その四)

- 一時 上田 治雄 宇佐美正祐  
 昭和十六、七、八年度會費  
 木下林三郎  
 昭和十六、七年度會費  
 内田 寛了 菊池 勲  
 昭和十七年度會費  
 谷原 保  
 昭和十六年度會費  
 岡島 澄男 高尾 省三  
 川邊 隆 森 誠弘  
 淺沼 淳 難波 春雄  
 田村 邦昭 若林 正  
 森 芳比 村田權太郎  
 井上 正次 東野清太郎  
 中村 文雄 中西貞次郎  
 野田 文雄 梅田 茂  
 今井 清 鈴木 繁造  
 佐藤 禮三 尾原 東成  
 花崎 常信 川島 楠治  
 伊藤 常信 吉田 元男  
 馬淵 精 井口 一一  
 大村 喜登 伊藤 岩吉  
 石橋 輝雄 田坂 鉄廣  
 半橋 鈴登 小寺 喜一  
 田邊 啓文 禰 隆一  
 佐藤 丈夫 森田 彦一  
 杉谷 連哉 橋本 利八  
 田中 保治 小林 和男  
 青柳 秀代 村上 玉雄  
 田中 健夫 澁谷 正俊  
 吉田 久雄 柴田 直一  
 玉川 照道 小笠原 巖  
 池田 忠徳 我謝 孟康  
 牛島 武雄 平田 榮福  
 長山 辨雄 津川 鑑一  
 松山 武雄 井崎 政壽  
 長尾 辨三 西川 一行  
 村田 正義 大槻 昇  
 小田 二郎 小松源之助  
 森田彦四郎  
 矢野 榮 川田 廣一  
 藤野末五郎 李 相傑  
 佐野 篤三 菅原 一夫  
 酒井 政之 前田 常好  
 三島 俊彦 吉川 友市  
 西尾喜太郎 長埜 景光  
 山根 大治 龍田 泰  
 高谷 幸吉 西口 公致  
 車田 輝平 村岡 俊三  
 佐藤 恒雄 利國 清信  
 今田 光匡 藤城 充郎  
 澤岡森之助 中村 俊滋  
 尾原 淳夫 鈴木 匡  
 赤井 定雄 鎌城 勲  
 桂 實 藤原 寛一  
 藤原 寛一 西川 勲二  
 上阪卯之助 平尾 堯英  
 高部 和男 辰馬慶次郎  
 藤尾 慶次 吉本 房造  
 吉見 嘉一 李 鍾浩  
 今村 良一 木藤 安之  
 奥田 正男 西浦 堯三  
 栗山 基一 近江 正治  
 田中 義雄 菅根 正治  
 森下 政一 宮下 英男  
 清水 清行 柴田 上  
 中西 興七 今川 太郎  
 深澤 高芳 伊東 太平  
 小島 春海 井山 友造  
 室谷 忠夫 板野 峻夫  
 江里日春志 戴下吟次郎  
 和田 信藏 金星 武三  
 増成 武雄 桑田龜之助  
 松村 欽治 櫻井喜三三  
 喜多由造 畦地 哲郎  
 高橋比左也 尾崎 正三  
 關谷 宣 中川 文平  
 佐藤嘉一郎 半尾 廉平  
 河崎 義雄 森脇 秀正  
 平田 賢二  
 戸田 正日  
 植村久太郎 辻川 正雄  
 平田 勉 岡田 靜一  
 金子 辰雄 清水 忠男  
 田村 淺一 小野田正孝  
 眞柴 長三 久岡 三郎  
 石隈 依義 佐藤 清  
 新野廉太郎 中島 高良  
 柴田 謙二 樋口恒三郎  
 宮本 萬里 浦田關太郎  
 筒井 一馬 松村常太郎  
 野口 茂樹 岡村 武雄  
 中村 喜一 神崎徳次郎  
 磯野 充賀 仁禮 景實  
 松井 幸藏 山崎林太郎  
 垣内 兼吉 武田 富英  
 樋口 續亮 西岡 梧  
 池田 憲三 大月義平二  
 佐伯 憲三 荒賀 勝平  
 木村源之助 後藤 武夫  
 御寄河内 西市 中場謙太郎  
 松本 政夫 金田 幸彦  
 上田榮治郎 井倉 二郎  
 藤田友三郎 檀 重雄  
 木村順次郎 小林儀三郎  
 渡邊良三郎 大木幾木馬  
 八木 巖 熊本 長春  
 宇治田高敬 三木 日吉  
 中山徳太郎 淺井 經夫  
 米谷卯三郎 松下 政二  
 山村鶴千代 山村 松廣  
 今西 晋勳 竹野 宗助  
 萬谷 輔雄 小野村胤敏  
 犬伏 巖 岡野重三郎  
 黒石 直衛 三宅 六郎  
 木下 定次 由利 貫造  
 北川 檀雄 古坂 忠雄  
 木原 仙次 三橋 國松  
 武田貞之助 田中 慎二  
 永井竹太郎 齋藤 正美  
 木村 榮  
 岸本 貞雄  
 倉木 善夫  
 岡本 勝治  
 池田 利房  
 石田 俊逸  
 橋 一男  
 東田 博雄  
 財木 三郎  
 原田 庄造  
 山口直三郎  
 中島 隆次  
 江本 雄一  
 利國  
 元内 敏雄  
 荒木 達實  
 福井 義郎  
 永田 正勝  
 小林 和一  
 森 英之助  
 竹内 勝  
 永井 量一  
 松岡 行雄  
 羽賀 一郎  
 永森 信行  
 齋藤 忠三  
 山口 特夫  
 織田 九郎  
 森 政太郎  
 深田 直三  
 古座 成夫  
 鈴木 正義  
 登藤 重勝  
 溝口 義章  
 越智 唯七  
 寺井惣一郎  
 藤植 福雄  
 須藤 榮一  
 須藤 榮一

(以下次號)

高松高商 前教授 岩井茂 著

# 新刊 異說貨幣論研究

A 5 上製  
價 三、八〇  
二二二

## ◆ 經濟特殊研究叢書第十編 ◆

凡そ事物は之を真正面から見るのが正道であらう、併し時としては側面から觀察することによつて反つてその真相が暴露されることがある之れ本書序文中の一句である。而して著者が高松高等商業學校に貨幣論を講ずること十有餘年、その正常的研究は先著『貨幣概論』の一書をなし、今又その側面的研究の部分を公刊して本書『異說貨幣論研究』となす。かくして正、側両面よりの研究によりて吾貨幣論界に一臂の貢獻を期す。

### ◻ 色特の内容 ◻

本書收むるところの内容は、第一篇「日附貨幣の研究」に於て、「日附貨幣の理論」と「日附貨幣の批判的研究」の二章を盛り、之を補ふに「商品ドル案と日附貨幣案」の一文を以てし、貨幣論界の驕兒シルヴィオ・ゲゼルの自由貨幣説と之が歐米に於ける實際の應用面たる日附貨幣案とを縦横に論じ、更に類説を殆んど網羅し検討してゐる。第二篇「社會信用的研究」に於ては、ダグラス少佐の社會信用論とカナダに於ける之が應用者エバーハートの所論を比較討論し、第三篇は「金問題研究」と題して、「英國に於ける金恐慌對策論」、「最近の金問題と米國の金對策」の二章を收む。而して全卷之れ貨幣政策的殊に貨幣改革論的意圖によつて蔽はれ、現下、革新の要望される經濟界に與ふる指針の多かるべきを信ずる。

## 發元所

大阪市北區會根崎上三丁目八 振替大阪三一九七二番  
東京市神田區駿河臺三丁目五 振替東京八一二三八番

昭和十六年九月十五日發行

關西大學學報第九十二號

### 既刊經濟特殊研究叢書

- |     |                                |           |
|-----|--------------------------------|-----------|
| (一) | 東京帝大前教授 矢内原忠雄著<br>帝國主義下の印度     | 價 A 二、五〇判 |
| (二) | 關西大教授經濟學博士 正井敬次著<br>金融論研究      | 價 A 二、五〇判 |
| (三) | 京都帝大助教授 堀江保藏著<br>日本資本主義の成立     | 價 A 二、五〇判 |
| (四) | 小樽高商教授 南 亮三郎著<br>人口理論と國際貿易     | 價 A 二、五〇判 |
| (五) | 大阪帝大教授經濟學博士 堀 經夫著<br>地代論史      | 價 A 二、五〇判 |
| (六) | 長崎高商教授 伊藤久秋著<br>經濟思想と學說        | 價 A 二、七〇判 |
| (七) | 經濟學士 吉田秀夫著<br>新マルサス主義研究        | 價 A 二、二〇判 |
| (八) | 關西大學教授 森川大郎著<br>銀行職能論          | 價 A 三、三〇判 |
| (九) | 神戸商大教授經濟學博士 丸谷喜市著<br>價值及價格研究一班 | 價 A 三、一〇判 |

株式會社 大同書院